

ディケンズ・フェロウシップ日本支部
Japan Branch of the Dickens Fellowship
2011年秋季総会 プログラム
Annual General Meeting 2011
Programme

日時：2011年10月15日（土）

Date: 15 October 2011

会場：京都大学大学院文学研究科・文学部（京都市左京区吉田本町）

Venue: Kyoto University, Graduate School of Letters, Kyoto

理事会 Board of Trustees Meeting (12:00～12:40)

新館 1 F 第 1 講義室 New Building 1F, Room 1

総 会 Annual General Meeting (13:00～13:40)

新館 2 F 第 3 講義室 New Building 2F, Room 3

講 演 (13:45～14:45) Special Lecture by Professor Toru Sasaki (Kyoto University)

司会 原 英一（東京女子大学教授）

講師 佐々木徹（京都大学教授）

『大いなる遺産』について

—On *Great Expectations*—

シンポジウム Symposium (15:00～17:30)

ディケンズと暴力

Dickens and Violence

司会・講師：松岡光治（名古屋大学教授） Mitsuharu Matsuoka (Nagoya University)

講 師：閑田朋子（日本大学准教授） Tomoko Kanda (Japan University)

講 師：矢次 綾（松山大学教授） Aya Yatsugi (Matsuyama University)

講 師：玉井史絵（同志社大学教授） Fumie Tamai (Doshisha University)

懇親会

Evening Party at Café Restaurant CAMPHORA (18:00～)

会費：一般5,000円、学生2,000円。

会場：カフェレストラン「カンフォーラ」（京都大学構内）

※ 会員控室は、新館 1 F 第 2 講義室です。

※ 会場案内図は以下をご覧ください。バス等で百万遍まで来て、百万遍の交差点南東角の入り口から入るようにしてください。そこから会場までサインポストが出ています。

<http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/about/access/>

講演

『大いなる遺産』について —On *Great Expectations*—

佐々木 徹（京都大学教授）

先般、幸いにも『大いなる遺産』を翻訳・出版する機会に恵まれたが、翻訳なるものは、小説のすべての文章を、あらゆる細部にいたるまで理解したうえで成り立つ作業（のはず）である。その際、当然普段以上の精読を強いられる。その「超精読」の過程で、この小説について、細かい発見がいくつかあった（と思う）。この作品について新しい解釈を提示するか、何か一つのテーゼを主張するわけでもないが、とにかくその発見のいくつかを披露してみたい。また、参考にした注釈書（ローゼンバーグのノートン版、パロイシアン『コンパニオン』等々）についての不満もぶちまけたい。

シンポジウム

「ディケンズと暴力」

司会・講師：松岡光治（名古屋大学教授）

「概論 — 抑圧された暴力の行方」

工業生産と人口を増大させた産業革命は犯罪と死刑も急増させたが、そうした暴力的な社会風潮は摂政時代が終わると共に（少なくとも表面的には）沈静化した。しかし、ヴィクトリア朝社会を実質的に支えた中産階級は暴力の衝動を単に抑圧しただけで、その衝動はディケンズの作品でも様々な言動を通して明示／暗示されている。暴力は人間相互の関係が支配・被支配の構造をとると必ず発生する問題である。概論ではディケンズ作品における暴力問題を分類・整理し、抑圧された暴力衝動が可視化される言動を幾つか考察することで彼の暴力観を導き出したい。「ディケンズと暴力」に関しては支部会員も必ず一家言あるはずなので、ぜひ質疑応答の際に披瀝されたい。

講師：閑田朋子（日本大学准教授）

「公の暴力としての死刑 — 招かれなかった作家 Eliza Meteyard」

Eliza Meteyard は様々な記事・短編で Dickens に言及し、*Household Words* への寄稿を望んだが実現しなかった。そのペンネーム Silverpen は Douglas Jerrold に与えられた名だが、Dickens と親しかった Jerrold は死刑問題に関しては Dickens と対立した。本発表は、のちのその対立を視野に入れて、1840年代後半の彼女の死刑観を探るものである。

講師：矢次 綾（松山大学教授）

「結婚を巡る女性の欲望、狂気、不満の表現としての暴力」

慎みや従順が女性の美德とされたヴィクトリア朝にあって、ディケンズは抗しがたい感情の噴出を、肉体的もしくは言葉による暴力、または暴力的な衝動として描くのに関心を傾けた。しかも彼は、そのような感情の噴出を、当時の女性が望みうる将来の唯一の選択肢と言

える結婚を巡って描いている。以上の点を踏まえて4人の女性（エスタ・サマソン、ローザ・ダートル、ミス・ハウィンヤム、ミセス・ジョー）の言動を吟味し、女性が抑圧された自我を表出させることにディケンズがどのような態度を示しているかを考察したい。

講師：玉井史絵（同志社大学教授）

「“The times are levelling times” — *The Mystery of Edwin Drood* における民主主義と暴力」

The Mystery of Edwin Drood における帝国の問題はこれまで多くの批評家によって論じられてきたが、階級に関してはこれまで見過ごされてきた。しかし、第二次選挙法改正の数年後に書かれたこの小説では、人種ばかりではなく階級の秩序が崩れ、社会的な混沌へ陥ることへの恐れが、〈暴力〉という形で表現されている。本発表では、小説におけるそうした〈暴力〉への不安と秩序回復の試みを分析したい。